

学校点描^{プラス}

梅雨があけたとニュースで言ったと思ったら、日本各地に大雨と土砂災害の警報が鳴っています。

《K中学校》

NO.7

R4. 7. 20

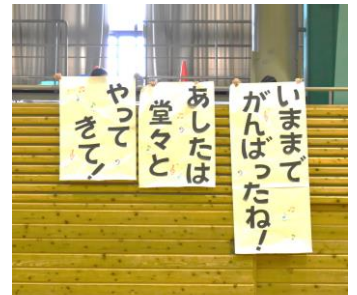
担当：校長

7月4日（月）にはY県スキー連盟T会長さんとS理事長さんが来校なされ、スキー部のK・Jさんを令和6年2月に本県で開催される第78回国民体育大会の候補対象選手として指定する指定証を持参なされました。高校1年生になったときに県代表として活躍してほしいという思いです。

5日の午前中は、1年生が地域の方々を講師としてお招きし様々な講座にわかれて学習しました。“K・A先生の短歌作り・H・Y先生の笹巻きづくり・S・A先生の韓国料理と文化・S・M先生の茶道・M・S先生の山の恵みを知る・Sアンドレア先生の国際文化”いずれの講座もさまざまな準備をしていただきながら、3年ぶりにK町にお住まいの地域の先生とのふれ合いを行うことができました。

15日（金）は、教職員の研修の後に体育館に移動して、吹奏楽部の合奏を職員だけで聞きました。本当は水曜日に壮行式を行う予定でしたが、地区内での新型コロナ感染拡大により大事をとって中止したからです。満足した練習量ではなかったかもしれませんが、一人一人緊張感のある演奏でした。翌日のコンクールでは残念ながら優良賞で県大会出場を逃しましたが、あの体育館での合奏では一人一人の努力が音色となって聞こえた演奏でした。

体育館での合奏を終えた後、ギャラリーで聞いていた先生方から垂れ幕が落とされました。事務員のT・Kさんを中心に仕事の合間に作ってくれました。結果はどうあれ、こんなことができる学校でありつづけたいものです。



頭を下げた父が与えたもの

「親が亡き後を思うとわが子が心配になります。」保護者との相談の中で、ときどき保護者の方から聞いてきた言葉です。親というものは、どうして、そんなに自分が亡くなった後のことまで心配するのでしょうか。きっと、わが子という一人の人間に、親・保護者という立場で深く関わり続けてくれる人は、この世にはいないからだと思うからなのでしょう。だからといって、親が死んだ後も十分な蓄えを残そうとするのは親としての本当の有り様ではないでしょう。その中でAさんという保護者の方は「人に魚を与えると1日で食べてしまう。でも、人に釣り方を教えば生涯食べていく事が出来る」という中国の格言になるほどなあと思っています。せめて、子どもには「釣り方」を授けられたら私はきっと安心すると思います。」と語っていました。

わたしはというと、男三兄弟のまん中に生まれ、だいたい、兄からのおさがりでしたから。中学生の時の制服にしろ、さびついた自転車にしろ、習字箱から絵の具箱まで、すべてお古でした。だから、4歳上の兄からもらった習字道具や絵の具入れなど、だいたい、お古でありデザインやカラフルな色に変わった周囲の友人の持ち物とは違っていました。中にはそれが嫌で、兄や姉のおさがりがあっても、新しく買い与えてもらった友人は、数多くいたものです。高度経済成長期の日本が豊かになった時代でした。でも、残念ながら、わたしの家庭ではそれを許してはくれませんでした。

『今あるものでなんとか工夫しろ』というのが、きっと父がわたしに与えた“釣り方”です。

今月は、学校の外に出て学習したり、地域の人を先生として学ぶ教育活動が目白押しでした。

特に、7月5日（火）から7日（木）の3日間は、2年生が、学校を離れ町内外の事業所に通って、実際の現場で仕事を体験する『インターンシップ』を金校生と一緒に行いました。中学3年生の受験生になってから将来のことを考えるのではなく、中学2年のこの時期に社会に出て、働くことの意義を理解してほしいという願いからです。

各事業所からは、現場に来て働いた中学生への感想をいただきます。「与えられた業務をしっかりやり遂げた」とお褒めもいただきましたが、「挨拶の声がまだまだ小さい」「もっと積極的に動いて欲しい」という、働く者としての心構えのアドバイスもあります。その他にも、生徒の言動を見て、厳しいご指摘もいただきました。ありがたいものです。学校は成功の体験で満ちあふれています。社会に出て一番ぶつかるのは、失敗の体験と、そのときのリカバリーです。学校では教えることができないことが、社会の中の実体験の中にはいっぱいあります。教科書にも書いていない大切なことが、社会では必要となることを教えてもらえたことがありがたいです。

中国の格言を教えてくれた保護者のAさんがいました。父親であるAさんは大家族で、自分一人の収入で4人の子と祖父母を養っています。中学校は制服だから助かると言っていました。

そのAさんの二男が修学旅行中に、同じ班の生徒とけんかして殴ってしまったのです。旅行後に、Aさんは二男とともに、殴った相手の生徒の家に行って、わが子の前で深々と頭を下げて謝罪しました。でもAさんは、けんかした話を聴いたときから、わが子を叱りませんでした。



けんかのきっかけは、あるレストランに入っても何も頼まないAさんの二男に対し、リーダー格の男子生徒が「貧乏人!」と言った一言だったのです。家族みんなへのお土産を買った二男には、もうお小遣いは残っていませんでした。

父親が頭を下げた後、家路につく途中で、二男は泣きながら父に頭を下げたそうです。

この話を聴いたとき、わたしは、Aさんがわが子に、この社会を生きていくための本物の“釣り方”を与えたかったのだと思いました。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。